文化

「ムスビ」と「キ」と「ヒ」と

笹谷良造の民俗学（その二）

なら民俗通信 257

西村　博美

「酒と女性」、深い関わり

▼「キ」（酒）のはなし

先日、ある知人と歓談していて、話が「酒」のことに及んだ。その方は醸造法や醗酵（はっこう）学について詳しいが、酒の歴史についてもっと知りたいとおっしゃる。

当方は多少、酒をたしなんで来たものの歴史については、とんと知識がない。そこで前回の小稿に続いて、笹谷ならば、と著作の頁を繰った。それは、笹谷良造が『古代日本の民俗と生活』（東出版、一九六二年）と題する著書の副題を「酒を捧げる女」としていたことに気づいたからでもある。

笹谷は、「難の生（キ）一本」や「御酒（オミキ）」、あるいは祭りに用いる「黒酒・白酒（クロキ・シロキ）」という名が示すように、「キ」は、酒の古語であったと言う。また、一方で、傷口からにじみだす液体をキシル、胃から出る酸（す）っぱい汁をキミズ、さらには唾（つば）をツバキといったように、「キ」は人体に関係ある精気を含んだ液状一般をさしているらしいと、笹谷の豊かな語原解釈は、論考の冒頭から説得力をもって展開する。

▼酒を祝い造る女

わが国において、かつて酒を造るのは　女性のしごとであったとされている。柳田国男は、「人のイハヒの為に欠くべからざる特別の飲み物は、女で無くては之を作ることを得ないか、又は女のみが之を醸（かも）すカを持つて居る様に考へられて居たのである」と言っている（「木綿以前の事」）。

また、笹谷の師である折口信夫は、『古事記』の「このみ酒（キ）は、わがみ酒ならず。酒（クシ）の神、常世にいます、石（イハ）立たす少名御神の［……］」の歌から、「まれびとによつて酒ほがひが行はれると見たことが知れる」と述べる（「国文学の発生」第三稿）。

笹谷良造は、これをすすめて、「酒祝ぎ（サカホギ）／酒祝（サカホガヒ）」さらには、「酒栄キ（キサキ）」というものの意義を考えようとしている。笹谷はここで、①酒が出来るか否かは、それ自身が神の意志たるホ」の現れであること。②「サカホギ／サカホガヒ」という語は、酒によって相手（神）を祝福するのではなく、「酒ヲ祝（ホ）ガフ」こと、すなわち酒そのものを「寿／祝（ホ）ギ作る」ことから来ている。③サケ（酒）という語もまた「栄（サ）ケ」すなわち祝福されたものの意から、それを行った女性を「酒栄キ（キサキ）」と称したのだということを導いていく。

「森口奈良吉翁歌碑除幕式」での笹谷良造（後列右、昭和40年11月３日）

▼「キ」を捧げる「神の嫁」

笹谷良造の「キは酒であり、それを祝（ホ）ぎ作り、かつ神に捧げるのが后（キサキ）の任務であったことは間違いないと思う」という「大胆な仮説」は、いわば「酒栄キ（キサキ）、その再活用した酒栄ヒ（キサカヒ）と酒祝ヒ（サカホガヒ）の三つは同一のものである」という根拠に基づいてなされている。

酒造りをつかさどるばかりでなく、祭祀（し）に際して、神や客人に酒を飲ませるのも、また「神聖なる女性の神聖なる任務」（笹谷）であった。すなわちそれは、主客に対して「神の嫁」たる資格をもってなされる「神聖に接しうる女性」（キサキ）の職掌であったというのが、笹谷の重要な論旨になっている。

笹谷は、この論文の終わりのほうで、もう一つ面白いことに触れている。「古代にあっては、酒は飲むべきもの、というよりは寧ろ『飲ませる』べきものであり、客人（マレビト）を十分に歓待する」ものであった、しかるに「日本の宴会も厳粛なるべき精神の忘却と、無制限なる拡充とは、濫（らん）用無規律の程度を越えて収拾すべからざる状態に立ち至っている」。これに「至っては」ただただ自戒をもこめて平身頭を低く、笹谷の言うところを聴くしかない。

▼「ヒ」という霊について

笹谷良造の講演「縄の文化」については、小稿の前回（10月7日付、256回）にも少し触れておいた。

そこで笹谷は、「ヒ」とは人間の霊のことを言う。（とくに）子供の霊は弱いのでヒ（霊）が出やすい。つまりヒ弱い。だから（ムスビの神に）ムスビこめてもらう。すると子供はヒダツと言うのだと語っている。さらに笹谷は、「ヒ」という霊は、昔の人は目に見えるものであって、虫の形として考えていたと言う（虫の居所が悪い・弱虫・泣き虫・虫の知らせ・虫の息・虫が好かん……などという語が残るように）。

このようにして笹谷は、「民間に残存しているムスビの信仰のかたち」を追い続けることを怠らなかった。そしてそれは、なによりも師である折口信夫の後を追い続けることでもあった。

▼折口信夫を継いで

「産霊（ムスビ）の神に就（ついては、私達（たち）にはまだまだ説明できないものが沢山（たくさん）ある。ともかく、神・人間を此世に出現させて来る産霊の神は、普通の神とは違ひ、日本の神道に於ける根本問題の一つであり、若いあなた方が是から拓（ひら）いて行く道でもあるのだ。勉強してくださいと折口が語ったのは、亡くなる前年の昭和二十七年のことであった。

そして笹谷は、自らの著書の「後書き」に記している。「（私は）とうとう学問の道に立ち帰る決心をした。（略）幸いにしてほんの少しでも先生の考えを伸ばす――伸ばすというのが不当なら、先生の考えの間隙を埋めると言ってもよし、（略）奥底の知れぬ深い学説の後附けと言ってもよい、自分の分に応じた事を我がままにやって見ようと思い立ったのである」（『神々の世界』）。

わたしは、笹谷良造の著作を追いながら、折口信夫の学問の「正統」を継ぎ、それを「発展」させようとした、その第一人者こそ笹谷その人であるという思いを今、強くしている。

（詩人・奈良民俗文化研究所研究員）

……

笹谷良造（1901～1969年）民俗学・国文学者。